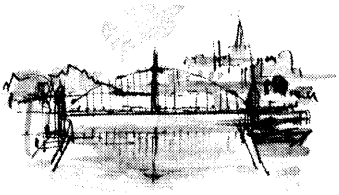
ヨーロッパをたずねて



田中　都慈子

今回の旅行は、最初「イギリスで日本の幼児教育（二教育）を考える訪問団」として、五月二十四日から六月十二日、二十日間の予定であったが、種々の理由により、六月二十一日から七月十一日、二十一日間に変更となった。また、人数も周郷先生をはじめとして六人であったので、造園関係のグループと一緒に行動することになり、旅行会社の人を含め、総勢十三人で出発したのである。

少人数のため、二、三人つれだって町を歩くことが多く、「歩きながら考える」ことができたことは、この旅行の大きな収穫であった。しかし、七月一日からそろってヴァカンスに入ってしまったため、はじめの目的である、イギリスに長く滞在して、キンダーガルテンやナースリースクールなどをみたり、他の国々の施設をみるという機会が少なく残念であった。

結局、北極回りでコペンハーゲン――ロンドン――アムステルダム――パリ――ジュネーブ――ミュンヘン――ローマ、南回りで七月十二日午前一時に羽田に帰りついたのであった。

はじめての渡欧で、うれしいという気持ちよりも不安で、空港についても落ちつかなかったが「何も心配することはないですよ」と流暢な日本語で、在日六年というオランダ

人の老紳士になぐさめられ、ほっとしてコペンハーゲンまで十八時間を過ごすべく飛行機に乗りこんだ。

最初の給油地アンカレッジの空港売店には、数多くの日本製品が並んでいるのに驚いた。広々とした土地とはいえ、十分もみていたらあきあきするような変化のない景色であった。六月二十一日を三十六時間過ごし、コペンハーゲンで、またもや朝を迎える。

ホテルでぐっすりと眠ってから、近くを散歩する。広い通りが四方にのび、ゆっくりとしたたたずまいと、庭に咲きみだれる大輪の花にびっくりする。小学校に併設された幼稚園をみつけたので、翌朝見に出かけたが、建物には鍵がかかり、職員は誰もいないようであった。道で出会ったいたずらそうな男の子二人が、校庭の真ん中でキョロキョロしている私達に、校門の大きなかんぬきを閉める真似をしてニヤニヤしているのみだった。

澄みきった空気の中に、金髪、原色に近い赤、黄、青の洋服がよく合って、明かるい日射しに輝いてみえた。アパートのテラスも配色よい色がぬられ、その窓辺には、きれいなカーテンが下がり、道ゆく人の目を楽しませてくれる小さな人形や犬の置物が、置かれてあった。町全体が、静かで、キャーキャーいう子どもたちの声は、全然耳にしなかった。自転車に乗った主婦たちが、買物の帰りに室内装飾のお店を熱心にのぞきこんでいる姿や、小さな男の子が、犬を散歩させている姿をみかけた。

二日目の朝、有名な人魚像を見に行こうとホテルの前で車を止めると、運転手さんは、デンマーク語とドイツ語しかわからないドイツ人であった。そこで私たちは、大変おもしろい経験をした。というのは、一枚のコペンハーゲンの市内地図と私のあやしげな英語で、なんと一時間近くも話をし（？）、お互いに相手のいっていることを理解したからである。往きに写真が撮れなかったのを覚えていて王宮にもう一度寄ってくれたり、一番にぎやかな通りの入口まで車をつけてくれた。どうして彼のいっていることが私に通じたのか、今もって理解できないが、楽しいひとときを過したのである。彼も感激して握手をもとめてきた。ふと思いついて、私は小さな金色の鈴をあげた。彼は大喜びで、上衣のボタンホールにつけ、片眼をつぶってみせた。

翌日、ロンドンにたつ前の時間をある児童公園で過ごした。道路から少し入ると、緑につつまれて浅い池がある。その両側には、大きな柳の木や、ばら園が続き、老人たちのいこいの場所となっている。その日は、とてもよいお天気で、裸になった子どもたちが、水しぶきをあげてとびは

六、七人の男の子が、中学生ぐらいの子どもを中心に舟をつくっている。

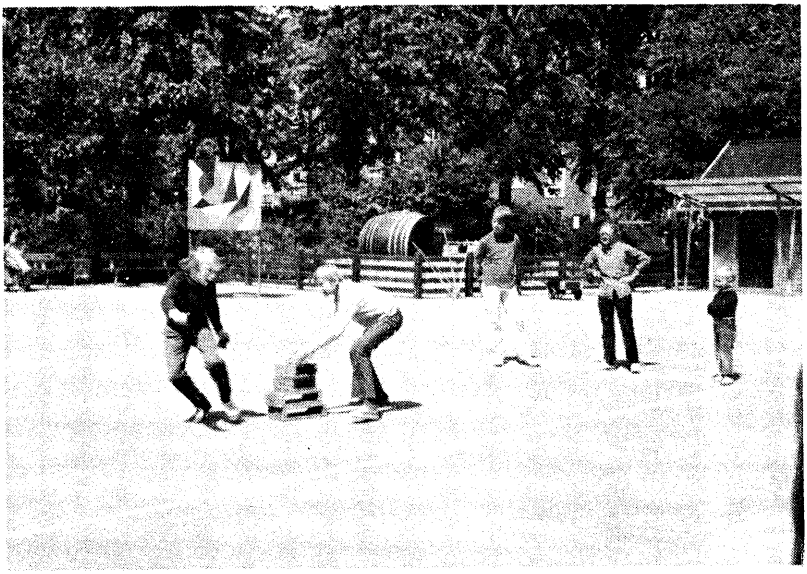
その公園には、六十歳ぐらいの女の指導員がいて、子どもたちの遊び方をみては、指導し、物置から竹馬を出してきたり、テントを出して子どもたちと組み立てたり、輪投げをしまったりというふうに、全体に目を配っていた。ヨチヨチ歩きの子どもをつれた若いおかあさんも、その先生を手伝って、他の子どもたちの面倒をみていた。物置の近くには、玉つき台があり、小学生ぐらいの男児が、盛んに玉つきをしている。白髪のおじいさんや高校生ぐらいの男の子が、ベンチにすわって、子どもたちの遊ぶようすをじっとながめている。遊んでいる子どもたちもわれがちにと騒ぐこともなく、陽をいっぱいに浴びて、のどかな風景であった。中央の広いところには、白線がひかれ、時折、先生が中心となって、輪から出たり入ったりするゲームや、男の子だけで二組に分かれ、真ん中におかれた台の上の物を、笛の合図で相手より早くそれをもちかえってくるあそびをしていた。それは、集中力と相手の虚をつく敏捷性を必要とするものであった。しばしにらみ合いが続くといった場面もみられ、力の合った子どもを組ませ、点をとっていた。

コペンハーゲンの子ども

ねていた。ボートを浮かべて遊んでいる子どももいる。

生垣でしきられたその奥に児童公園がある。木でできた子どもの家、組んでおかれた丸太、タイヤのぶらんこ、波型にそったすべり台、赤い手押し車、シーソーなどが、おいてある。すみの小さな砂場では、男の子二人がさかんにトンネルを掘っていた。またもう一方では、大きな積木で、

同右　児童公園で



明るいコペンハーゲンからロンドンへ飛行機で二時間。テームズ河を横にみながら車でホテルへ向かう。一週間ばかり前に建ったばかりという話で、さすがのロンドンの運転手さんも、何回も車を止めては道をたずねていた。ホテルの前は黒人の住むプレハブ住宅が並び、町の裏側という感じであった。しかしそこも「二年たってきたら、立派な建物が並んでいるよ」と都市計画に関係のある英国人の友人がいっていた。

英国では、現在たくさんのニュータウン計画があり、その多くは着々と実行に移されている。そこも再開発地区の一つであるという。工事は、何十年という長期計画のもとになされているのである。

道ゆく人々には、未来に対する着実性と安定感がみられ、しっかりと大きく根をはった生活をしているようすがうかがわれた。

ピカデリーサーカスのような繁華街にある、古い歴史をもったタバコ屋さんも、誇りをもって自分の職業に従事している。店の入口の上には、創立の年数が、誇らし気に刻まれていた。ほとんどが専門店で、何百種類という品物を昔と同じように、古いよさを残して経営しているようすであった。少しも客にへつらうことがなく、卑屈さが、微塵も感じられなかったことが快かった。

「古きを尊び、しかもなお常に新しいものを模索する——というのが、英国人の国民性の一側面といわれている」をどこかで読んだことがあったが、この国民性によって、公害防止対策のよい前例を残し、数々の業績を生んだのではないだろうか。超現代的なものと古いものが、うまくまざった都会がロンドンである。

ロンドンの北西部に、ある教授のお宅をお訪ねした時のことである。そこはちょうどメモリアルパークの近くで、その日はメモリアルデーであった。軍楽隊が練習をしたりしていて、にぎやかであった。公園の中に入ると、きちんと手入れされた何千というばらに、一つ一つ亡くなった音楽家や作曲家、詩人の名前がつけられ、踏み石にも、名前と年号が刻まれてあった。その公園の一角にある芝生のはえていない部分に、遺灰の一部をまくことになっているということだった。池には、水蓮の花が咲き、柳が水面にたれさがり、もみじやあやめが、まるで日本庭園のように植えられていた。今日のために集まった遺族の人たちが、中央の芝生に集まっていたためか、すれちがう人もなく、蜂の羽音もきこえる静穏さであった。

メモリアルパークを出てから歩いた小道には、木の枝が

両側からたれさがり、名もない雑草がおい茂っていた。先生のお話によれば、一区画ごとに緑地をはりめぐらし、その帯状の部分は、政府の所有地になっているということであった。ロンドンの中心部でも数知れないほどの緑濃い芝生のはえそろった公園があり、車道との間にも樹木がはえているのである。

家々の庭は、一見自然のままのようだが、よくみると手入れがいき届いているのに気づく。ちょうど、ばらが色とりどりに大きな花をつけていた。それは、まるでそこの住人のようにゆったりと、ほのかな匂いで、その存在をそっと知らせているかのようであった。

アメリカに住んでおられた先生は、今度の二年間のロンドン在住で「イギリスは、古い歴史の上にしっかりと足をつけている」とつくづく感じたといわれた。労働者もきれいな英語を話すし、学校の父兄会でも、どの母親も人前できちんと自分の意見をのべ、議論をする――といって奥さまも驚いておられた。

英国は、中央からの命令ではなく、議論で動く国である。権力で問題を解決しない。学校では、作文をとても大事にしていて、詩や文字から学ばせる。すぐれた文章を写すことによってことばの使い方、ことばの意味を考えさせ、言語のもつ論理性、構成を考える。正しいことばのもつ正しい意味について、議論する。また宗教と教育の関係については、宗教を人と人との美的な感じとして教えているのであって、宗教の教義として教育を教えこむのではないということであった。

次の日、カウンティホールの中にあるオックスフォードライブラリーに行く。そこには、三人の視学官がいて、積極的に先生と生徒を対象として、本と視聴覚教育のアドバイザーとなって活躍しているとのことであった。一、二〇〇の学校の本を選定し、数を決めて発送する。支役所が援助し、学校の教科書は無料配布である。あらゆる種類の本がぎっしりと並び、展示されている。教師は、自由にそこから借り出すことも、本についての説明をきくこともできるようになっている。

絵本について質問をしたら、二人の係員が、次から次へととても丁寧に説明をしてくれた。そしてそれに関係した本や新しく発刊された絵本を紹介してくれた。特にチャールズ・キーピングのものは人気があるという。またモーリス・センダックの絵本は、その独特な絵にこどもたちはひかれるといっていた。日本の絵本「夏の朝」なども多数、英訳本が並んでいた。一冊ずつの本について、はっきりと

リビングストン・ナースリースクール

理解し、専門的な意見をもつアドバイザーに相談することのできる英国の先生方をうらやましく思った。

その後、同じ建物の中で開催されていた小学校の自然科学展示会に立ち寄った。会場は、実際指導のコーナーを中心に八つのプログラムに分かれて設置されていた。「空気の動き」、「建物」、「暑い寒い」などといったプログラムに一人ずつ担当の教師がつき、参観者の疑問に答えている。小学生の作品が、説明といっしょに数多く展示されていた。

午後は、トッテナムコートにあるリビングストン・ナースリースクールを訪れた。快く、自由に見学することを許された。ここは、午前中だけのクラスと、午後だけのクラス、十時から三時三十分までの一日のクラスの三種類に分かれている。助手の先生がついて、一人の先生が三十名を受けもつ。一クラスの中に、各年齢が混ざっており、その事は、英国の小学校が相互援助のための「縦のグループづくり」をめざしていることにつながっている。年長の子どもたちは、年下の子どもたちにいろいろ力を貸してやることができ、責任感と自分の重要さを感じる——という考え方を示していた。

子どもたちの活動をみていると、大変個人の欲求を尊重し、それを満たしてやることに心がくばられていることに

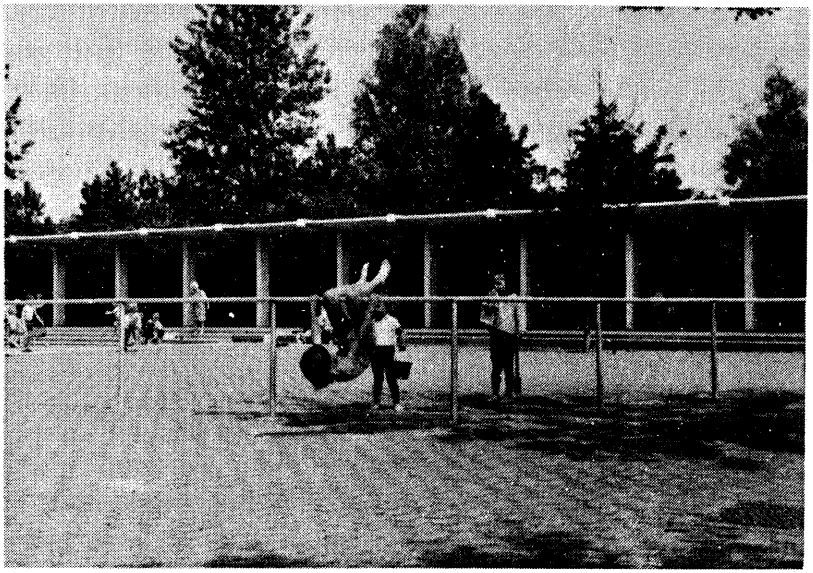
気づく。楽器をやりたい子どもを集めて、ピアノをひいてあげたり、絵筆がうまく使えない子どもに、一人の先生がつきっきりで使い方を教えていた。一人で筆が使えるようになった時、拍手をして共に喜んでいるようすをみた。庭では、鉄かぶとをかぶったり、頭にブルーの戦闘帽をかぶり、バズーカ砲をこわきに抱えて構える子ども、大きなハイヒールをつっかけて、余り布を頭からかぶり、ハンドバッグをかかえた女の子、病気の赤ちゃんを乳母車にのせた小さなおかあさんなど、それぞれが、自分の世界の中で、自由に遊んでいるようすは、見ていてほほえましかった。また、乳母車、ハイヒールなど、すべて本物が使われていることも興味深かった。へやのすみのままごとコーナーは、高さが高く、外からは人に見られず、話し声だけがきこえていた。隠れて遊ぶスリルを味わっているようであった。

時間をみて迎えにきた母親に、子どもたちは、あそびをやめて帰る用意をし、個々に先生にさよならをして帰って行く。先生方に勤務時間をたずねたら、八時三十分から四時三十分なのできついと嘆いていた。やはり朝のラッシュにもまれてくるので疲れると若い先生が話していた。

アムステルダムでは、一日がかりで、世界の園芸の展示場、フロリアードをみる。青く澄みきった空の下に、たくさんの草花が、色とりどりに植えられ、まるで万博のように人々が、ぞろぞろと歩いていた。学校の先生につれられた子どもたちや、車椅子にのったお年よりが、多く目についた。室内の展示場では、花を大きく咲かせる薬の宣伝や、生け花の指導が行なわれていた。

私たちの泊ったホテルは、コンセルトヘボウ音楽堂の近くで閑静な場所にあったが、電車にのって駅近くに行くと、たくさんのヒッピーがたむろして、ギターをひいて合唱をしたり、演説をしたりして、にぎやかであった。広場には、ベンチや椅子がおかれ、新聞を読む人、鳩に餌をやる人、歩いている人をながめる人、それぞれであった。

通りから生垣で幾重にも囲まれた児童公園には、日光を求めて、水着になった人々がいっぱいであった。池で水あそびをしたり、鉄棒やジャングルジムで遊ぶ子どもたちをみながら、芝生に寝ころがって日光浴をする夫婦が数多くみられた。そして四時ごろになると、乳母車を押したり、車にのって、それぞれが家路につく。シャッターの音もはばかられるほどの静けさと、昼食の後の夕食までのあいた時間を楽しむ主婦の態度がつよく感じられた。そこには誰からも束縛を受けない自由と、他人のことを干渉しないし



アムステルダム　児童公園

っかりした考えがみられ、私たちは、はっきりと「よそ者」という感じを受けたのであった。

アムステルダムから最新式の急行にのってパリの北駅につく。途中ベルギーを通過したが、飛行機を利用しての入国よりもずっと簡単であった。明るい陽ざしのアムステルダムからパリに入ると、天気もくもりがちなこともあって、古びた渋い感じの町にみえた。

台東区と同じ広さというブーローニュの森は、フランス人の運転手でも一度入ったら、どこか大通りにつき当たるまでは、自分がどこを走っているのか見当がつかないそうである。凱旋門の上からみたパリの町は、また格別であった。放射線上に走った並木道の向こうに白亜のサクレクール寺院や、ブーローニュの森、ラ・デファンスの再開発地区の工事現場などを見渡す。ここでもロンドンと同じように、都市の復興に力を入れていた。小雨もようの日が多かったせいもあったが、車の排気ガスによる空気の汚染を感じた。路上駐車が多く、通りの真ん中に長い駐車の列ができているのに驚いた。昔のはなやかな騎士道時代のなごりの、中庭と馬をつないでおくのに適した家のつくりがその原因のようである。どの道にも道を洗うための水道の栓が

かくされていた。

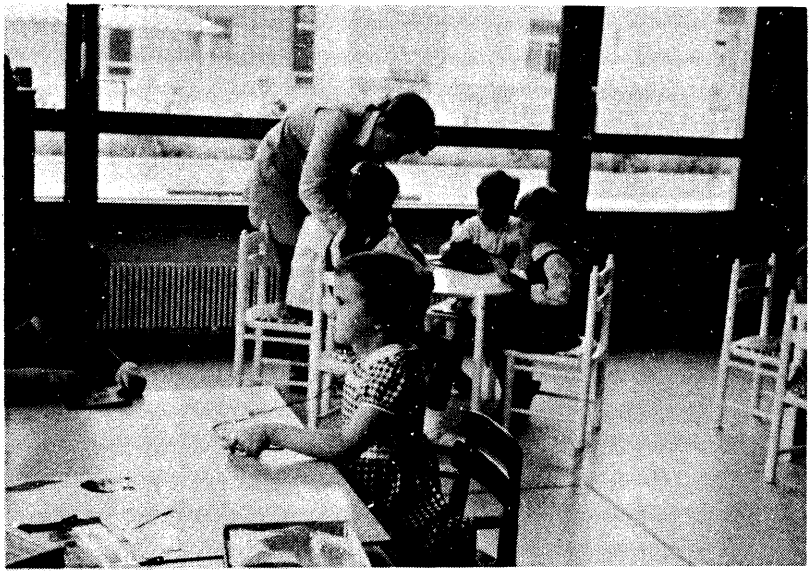
ルーブル美術館などをみると、フランスのもつ文化遺産の偉大さとその素晴しさに目をみはるばかりである。しかし、人々の顔には、生活のはりがみられず、疲れているような印象を受けた。国家威信第一のドゴール政権から国家利益を考えるポンピード政権に移ったあおりだというフランス人もいた。

夜になってサクレクール寺院に行く。内部の荘厳さに心打たれて外に出ると、ジーンズをはき、肩から長く編んだショルダーをかけた長髪の若者たちが、肩をよせあって階段にすわったり、集会をひらいている。坂道の両側のカフェは、彼らでいっぱいである。若さと熱気でむせかえるような暗がりから、静かな花の階段をおりてくると、まるでちがう国にいるような気がした。

狭い凱旋門の中で、エレベーターのくるのを待っていた時のことであった。中学生ぐらいのカップルが腕をとり合って、辛抱づよく待っている姿や、二組の夫婦が、小さな声で談笑していたり、いとおし気に自分の娘をながめながら、時折顔を見合わせてにっこりする父親など、たくさんの人たちが列をつくっていた。よくみると、幾人かの子どもたちもいることに気づき、久しぶりに子どもの姿をみた感じがして興味深くながめた。列から離れて走りまわる子どももいないし、大きな声を出すおとなもいない。時々、子どもの話をきくために大きなからだを折りまげて話をきいてやっている母親のようすを見るとはなしに見ていた。その小さな男の子は、列の前の方に並んでいた。エレベーターがきた時、その子は、チョコチョコと前に並んでいた紳士より先に、エレベーターにのりこんだ。その時、ぐいっとその手をひっぱり、ひきもどした親の勢いに驚かされた。そして次の瞬間、その無言のうちに行なわれた行為が、当り前のことであることに気づいた。人の迷惑にならないように心がけ、秩序を守るということが、社会の中で、生活の中でいかされていることを改めて感じたのであった。

国際都市ジュネーブでは、フランス系の幼稚園を訪れた。年齢別にクラスが分かれ、きちんと机の前にすわり、それぞれの年齢に応じた作業をしていた。ヴァカンスに入っているので、人数は普段よりも少ないということだった。

モンテッソーリやルビアンスカの教具や方法を用いていて、訓練ということを重視した教育であった。縦の糸に横の糸を通したり、形どおりに穴があいている上を毛糸を通した針でさしていくといった根気のいる作業をしていた。



ジュネーブの幼稚園

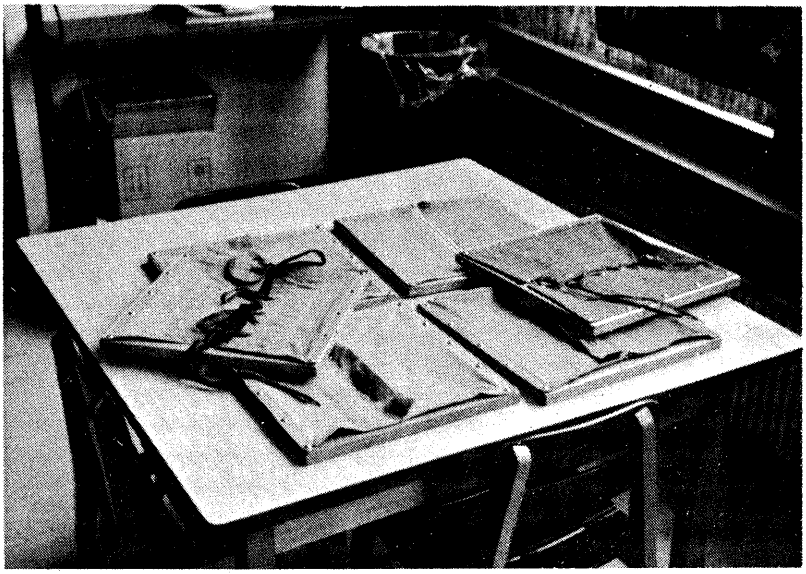
太い針でさして穴をあけ、そこを切りとって、下に違った色の紙をおいて仕上げた絵や、ちぎり紙で構成した絵が、壁に貼られ、形の認識ということが強調されていた。

また、ファスナーやボタン、かけひもなどの練習板、はめ板なども用意され、手先の熟練が要求されていた。就学前に、縦の線、横の線をひく練習をし、字のかき方、つづり方を習得させ、小学校に入ってからは、その上の段階をいくという話であった。

私たち訪問者のために、子どもたちは立ってあいさつをし、フランス語の歌を歌ってくれた。整然とした室内で、行儀よく静かに作業ととり組む子どもたちに、時折先生の口から出る「シ」という声が耳ざわりであった。

飛行機の時間を気にしながら、一二〇キロから一三〇キロで車をとばしてローザンヌまで足をのばす。マッターホルンは残念ながら見えなかったが、レマン湖対岸の、水で有名なエビアンの町をみることができた。レマン湖のまわりは、船着場をもった豪壮な大邸宅が並び、空と湖水の区別がつかないほどの青さを背景に真白なヨットが帆を張っていた。

オリンピックの準備でにぎわうミュンヘンは、活気のあ

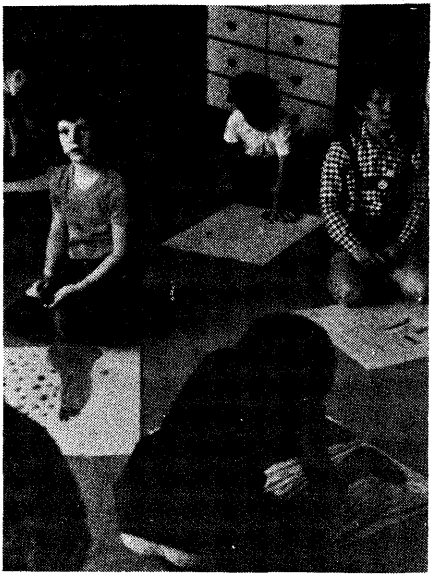


同　右

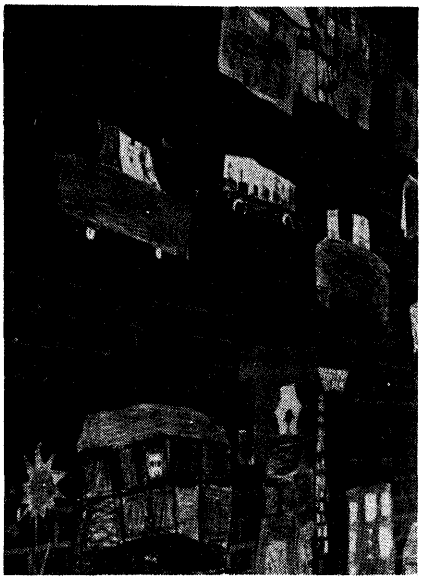
る町であった。オリンピック会場も着々と出来上がり、勤勉なドイツ人は着実に働いている。学生たちも、休みの間はガイドや運転手のアルバイトをして働き、夜になると、近くのビヤホールに集まって学生歌を歌ったり、飲んだり踊ったりして、そのあり余った力を発散する。しかし、夜十二時になるとピタッとやめて帰っていくという健康で陽気な生活を送っている。

ローマに立つ朝、ミュンヘンの公立幼稚園を見学した。小学校と併設ではあるが、広々とした芝生でつながっているこの幼稚園は、町の社会的機構に属していると共にホルトという制度をもち、教会にも属しているという話だった。また父兄の収入によって支払う金額が異なる。一クラスは三十名で、各クラスはそれぞれの庭をもっている。小学校に行っている子どもでも、十歳までは、放課後、幼稚園にきて夕方七時頃まで就学前グループに入って遊ぶことができる。小学校と密接につながっているのである。玄関やへやの壁には、のびのびとした子どもたちの作品がはられ、廊下の装飾には、先生方の創意工夫がこらされていた。

子どもたちの活動は、自由で明るい。昼寝がしたい時は、折りたたみのベッドや毛布をとり出して休めるし、おやつのりんごも食べたい時に用意をしてもらえる。友だちの遊



ミュンヘン公立幼稚園で



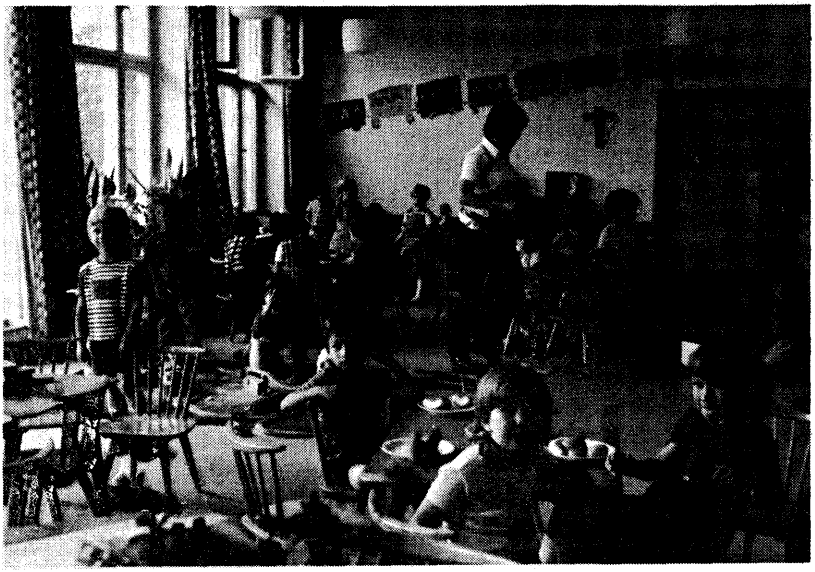
廊下の壁

ぶのを見ながら、小さな机を囲んで食べている子どももいた。ブロックを組みたてた飛行機を友だちにみせたり、パズルにとりくんでいるグループもみられた。便所には、タオルかけに一人ずつ、タオルとくしが用意されていた。

大きな紙を床に広げて、クレヨンで絵をかいているところもあった。のびやかなタッチに驚く。庭では、一クラス全員が大きな輪をもって、円の中心に立った先生のならすタンブリンの音で、スキップをしたり、走ったりしながら、音がやむと輪の中にもどるというゲームをしていた。

一まわり見学してから、就学前の子どもたちに用意された何冊かの本と用具をみせてもらう。それらは、数学的思考を促すものであった。数、形、色、順序、時間などの認識と概念、左右の感覚、自然物の名称、ことば、詩にいたるまで、数冊に分かれ、段階を追ってかかれたものであった。それらの知識は、小学校、中学校、高校へと積み上げられていくように考慮されていて大変高度なものであったが、今日特に、大事なものであるように思う。

この旅の最後の町ローマは、どの町よりも人が多く、ごみごみしていた。午後二時から六時までは、デパートさえも徹底的に店を閉め、昼寝に入ってしまう。町を歩いてい



ミュンヘン公立幼稚園

るのは旅行者ぐらいなものである。遺跡はとても素晴しく、大切に保存されていた。町には乏食やすりが横行していて物騒ではあったが、人々は陽気で楽天的であった。明るく楽しい町であった。

ローマ最後の夕食は、二時間半かかって、二皿しかでてこないという状態で、しかもその間、注文しないものが、何度も食卓にあらわれるということで、大笑いしたのである。決して急ぐということなく、間違えても謝まることはしない。その悠長さは、私たち日本人のきまじめさと対照的でついていけないものがある。

映画「終着駅」の舞台になったテルミニ駅近くにマリーニというカフェがある。アーケードの中にあって薄暗く、風が吹き通し、そこにすわって飲む冷たいレモネードの味は格別であった。何度か行って顔なじみになった黒の蝶ネクタイをしめたその店のおじいさんに小さな鈴を一個あげた。不思議なことに、外国にきて、少しでも話をし、気持ちが通じる人がいると、その国に対してとても親しみがわいてくるものである。ローマをたつ前に最後のレモネードを飲みに立ちよったら、彼は、両手を広げて私を迎え、「昨日もらった鈴を自分の家の入口の戸につけたので、戸が開く度に、チリ、チリとなるよ」といって喜んでいた。自分の気持ちを率直に相手に伝えるそのようすは、みるからに気持ちがよく、心が暖まった。

長いと思っていた三週間の旅も終わってしまった。まだまだヨーロッパに残っていたいような気持ちで、帰路についた。帰りは南回りだったので二十三時間かかり、さぞ退屈だろうと思っていたが、「旅は道づれ……」で、私の隣にすわったスエーデン人夫婦のおかげで、とても楽しかった。三週間の休暇を利用してバンコックとネパールに行き、奥さんの見たがっているヒマラヤをみるつもりだと楽し気に話していた。この中年の夫婦の心から愛し合っているようすは、はたでみていても気特ちよかった。五十二、三歳ぐらいだと思うが、まるで子どものようにはしゃいでいた。バンコックまでの楽しかったおしゃべりの思い出に、小さな鈴をあげたら、大喜びで、それぞれ自分の荷物につけ、国に帰ったら、車のフロントガラスにつけようといって別れて行った。

いろいろな人たちと会ったり別れたりして、名ごり惜しく思いながら、雨のふる羽田にもどったのである。

今度の旅行で、私が一番心を打たれたのは、自然の美しさであった。自然がなんと生き生きとのびのびとしていた

ことだろう。それで、その国に住む人間にも大きな影響を与えているのではないだろうか。ちぢこまった心の狭さを感じなかった。人々は、その自然を心から愛し、誇りにしているのである。

ヨーロッパでは、花を平和の使者と考えるという話だった。なぜなら、破壊と悲惨さをもたらした戦争の後に残ったものは花だけだったから。そしてまた、現在、都会に住んでいる人の多くは、田舎の人なので、常に田舎に対してノスタルジアを抱いているのである。オランダでは、花と野菜の栽培の比率が、七対三という。そしてドイツやスイスに輸出している。農業国と工業国とが助けあっているのである。

どこの国にも、都市化現象に対する疑問がでてきている。観光というものが大きく割りこんできたためである。しかしまだまだヨーロッパには「地方」が存在し、地方色を維持している。そこには、独特な伝統や風習が色濃く残っている。わが国では、どうだろう。東京の製品を地方に買わせるという政府のやり方は、間違っているのではないだろうか。「地方」が消えかかっているように思われる。

パン一つにも誇りをもち、人々は、それぞれ、好みのパン屋に買いに行く。また古くから続いた自分の家の職業に誇りをもっている。私たちは、どれだけ自分の国に誇りをもっているだろうか。

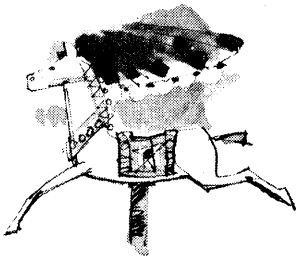
外国にきて、なんと何回も「ありがとう」、「ごめんなさい」を言ったことだろう。社会の中で男女、おとなと子どもの役割や順序が、じつに合理的に、はっきりと決められているかに気づかされた。しつけは、文化の形態であって日常生活の中心となるものである。日本の昔から続いてきたしつけの中に、戦後、ヨーロッパやアメリカの習慣が入ってきたため、形だけを真似した中途半端な状態に落ち入ってしまっているように思う。だから外国にいる間だけは、レディファーストを守り、日本に帰れば、またもとに戻るという妙なことになってしまうのではないだろうか。現在のように国際的な世の中に生きている私たちは、わが国のよい習慣をなくさず、また外国の合理的考え方とその意味を考えてみる必要があるのではないかと思う。

急ぐ人のために左側をあけてあるエスカレーター、信号が青になったら皆と同じ速度で、人にぶつからないように歩く人々、ちょっと肩がすれちがっても「ごめんなさい」と顔をみて謝る人たち——そこには、人間としてもつべき道徳が、守ろうとして守られている。後から人が来れば、戸を押えて待ち、相手も「ありがとう」と礼をいって次の

人のために戸を押える。すべてが、自然で、われがちにと前の人を押して入る人もいないし、すべての生活のリズムが機敏で能率的でありながら、ゆったりとしている。

他人の生活も自分の生活と同じように尊重する。裏を返せば、他人事に口出しをしないのである。しかし、いったん、その人を知り、信用したら、二人の間をこわす何事かがおこるまでは、友だちであり、その人の友だちもまた友だちとして信用し、迎えられる。この旅行で、個人的な信用の重みは絶対であることを知った。それはなにものにもかえることのできない貴重なものであり、お互いに責任をもつことなのである。

私たちは、人間関係の入りみだれた輪の中に暮している。民族も、宗教も、言語もちがう人々が、まざって生活して、いるのである。何よりもまず必要なことは、自分の意見をはっきりもつことである。哲学をもたないことは最大の欠点である。また自分たちの感じたままを率直に態度であらわすことのへたなことは、しばしば相手に誤解を招き、いらいらさせる。しかしなにもまして大事なことは、誠実な、暖かい心をもつことであろう。それだけは、万国共通のものであることを再認識し、うれしく思った。

現在、日本でもテレビで各国の幼児教育の実態が放映され、子どもたちの教育やしつけの面がとり上げられている。いくつかのナースリースクールやキンダーガルテンをみてそのさまざまなやり方で、幼児期を過ごした子どもたちが、おとなになった時、どんなちがいが見いだされるのだろうかと考えさせられたのであった。

（暁星学園幼稚園）